浜松医科大学開学四十周年記念誌

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 開学四十周年記念誌編集専門委員会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/2800

開学40周年に寄せて

開学40周年に寄せて

学長　中　村　　達

平成26年6月7日をもって開学40周年を迎えました。私自身が浜松医科大学に外科の助手として赴任したのは昭和52年10月1日でした。以来，約37年間本学とともに人生を歩いてきた感がします。本学は単科医科大学として特徴のあるきらりと光る大学を目指し，発展してきました。開学40周年にあたり記念誌が編纂されますが，大学の節目ごとの重要な記録になります。30周年記念日から10年間にどんな軌跡を辿ったか一目瞭然に分かるような記録になることを願っています。

この10年間，私事ですが，法人化されて以後寺尾学長の下で財務担当・病院担当理事を6年間務めさせていただき，次いで4年間学長を務めてまいりました。30年以上経た施設，設備，そして規則，規定等も無我夢中ですべて見直してきました。法人化した平成16年が開学30年目に当たり，寺尾前学長の下で法人化の嵐の中をソフトランディングしたのですが，第二期中期目標期間の後半になって，文部科学省は大学改革，機能強化の必要性を説き，大学はミッションの再定義を行い，法人化以後ずっと嵐が吹き捲くっている感じがします。そんな中で本学は施設，設備などを着々と将来のために投資する考えで整備を進めてきました。法人化以後10年間は，次の20年のための基礎づくりであり，成果も少しずつ上げております。コツコツ頑張っていけば今の本学は継続性のある発展を望めると考えています。

平成26年3月ですでに医学部医学科は3,460名，看護学科は1,099名，助産学専攻科は82名が卒業しています。既に本学卒業生達から学内外の教育施設の教授，あるいは研究所所長，部長などの管理職として，分かっているだけでも27名が活躍しておられます。現在の医学生の定員は1学年120名で，今年の入学生は県内出身者が約60％を占め，医科大学として地域に根付いて立派に貢献していくと思います。

現在，第二期中期目標期間の後半になりましたが，第三期へ向けて改革を進めています。浜松医科大学が，次の10年，20年「世界できらりと光る大学」としてますます発展していきますことを祈っております。

開学40周年に寄せて

理事（教育・国際交流担当）・副学長　小　出　幸　夫

いわゆる新設医科大学として出発した浜松医科大学が，本年開学40周年を迎えた。陳腐だが，時の経つのは速いと実感している。周りを見回して見ると，既に新設医科大学と呼ばれた大学は旭川医科大学，滋賀医科大学と本学の3校のみとなり，他の医科大学は国立総合大学と合併してしまった。また，この間開学30周年に当たる平成16年に全ての国立大学は「国立大学法人」として再出発することになり，本学も「国立大学法人浜松医科大学」として法人化された。大きな変化である。法人化後は6年ごとの中期目標・中期計画を立て，これに基づいた評価が毎年そして6年毎に行われる。大学にとっては大きな負担であり，「評価疲れ」との言葉も囁かれるようになっている。

さて，私は昭和54年9月より浜松医科大学にお世話になっている。昭和50年，私が27歳の時にUCLA医学部に研究留学した。NK細胞に関する研究も順調に進んでいたので長期滞在する予定であったが，諸般の事情により帰国することとなった。しかし，出身の内科では研究環境が十分でなく，当時微生物学講座教授の職に就いておられた吉田孝人先生が附属病院輸血免疫部の部長を兼任されており，その部の講師を探しておられ，研究は微生物学で行ってもよいとの有難いお申し出があり，即決した。その後，昭和59年に微生物学講座助教授，平成8年には教授にさせていただいた。この間，私の興味は「微生物学」によりふさわしい感染免疫に移り，特にリステリア，結核菌等の細胞内寄生菌の排除に機能するT細胞を誘導するDNAワクチンの研究に没頭した。

私事で恐縮だが，私達には二人の娘がいる。彼女らと過ごした約10年間の医大宿舎における生活は忘れがたい。当時は同世代の子供が大勢いたので，私達の娘たちも子供会の活動などを十二分に楽しんだことを記憶している。浜松医科大学に来て公私ともに本当に良かったと感謝している次第だ。

私は，教授の研究における大きな役割は大方針を示すことと，これを遂行するための研究費集めにあると考えていた。そのためには，良い論文を出すことが必須と思い，教室員の尻を随分と叩いたことを思い出す。申し訳ないと思っている。研究費集めに熱中するあまり，古巣Los AngelesにあるBroad Foundationから研究費を獲得した時は，結果をまとめるのに往生した記憶がある。このように悪戦苦闘している時に，思いもかけず，寺尾前学長から教育・国際交流担当理事に指名していただいた。国際交流にはある程度の手応えを感じていたが，教育には全く自信がなかった。正直言って，医学教育を真剣に考えるようになったのは理事に就任してからだ。最近特に医学教育に対する関心が高まっている。この点で「医学教育学会」の存在は象徴的だ。「理学教育学会」「工学教育学会」等の存在は寡聞にして知らない。この10年間での大きな出来事の一つは医学部定員増だろう。研修制度の導入により，医師不足が顕在化した。このため，本学医学部医学科も定員を100名から120名に増加した。看護学科においては，平成20年に助産学専攻科（定員16人）を設置したことが大きな変化といえる。微力ながら，今少し中村学長の下で本学の医学教育・国際交流に専念したい。関係各位のご協力をお願いする次第である。

開学40周年に寄せて

理事（評価・労務・安全管理担当）・副学長　鈴　木　　修

私は昭和54年に本学に着任し，大学発足5年後から現在まで約35年間，浜松医科大学にお世話なると同時に，大学を目の当たりに見てきた。よく学会で「浜松医科大学は新設医科大学の優等生ですね」などと言われ嬉しくなったこともあったが，現在までの浜松医科大学の着実な発展を考えると，歴代の学長と執行部の先生方，さらにはそれを支えていただいた教員・事務局諸氏のご苦労は大変なものであったろうと思う。私も執行部の一員に加えていただき，4年が経過したが，その苦労を身に染みて理解できる。

奇しくも，本学開学30周年の平成16年に，国立大学は法人化された。それを身を以て体感されたのが，前学長の寺尾先生である。法人化前の4年間と法人化後の6年間もの長きにわたって，学長を務められたため，否応なく，法人化の大変な作業にかかわらざるを得なかった。30周年記念誌に，寺尾先生自ら法人化の経緯を詳しく書かれている。

生前寺尾先生と法人化について時々お話をする機会があった。彼は，法人化後6年経過しても，法人化には大賛成論者であり，一抹の批判などお聞きしたことがなかった。確かに，法人化以前は，大学病院で黒字が出ても，すぐに新しい医療機器など自由に購入することは許されておらず，一旦文部科学省に全額返還し，改めて必要医療機器購入などを申請して，承認されれば黒字分が戻ってくるといった大変面倒な手続きが必要であった。下手をすると，業者への支払いに2年以上の遅れを生じ，業者の大半が大学病院との取引を敬遠した。結果として，権威のあるべき大学病院の医療設備は，周囲の大規模病院に大きな後れを取っていたのが現状であった。現在はそのような手続きは全く不要であり，黒字分で直ちに最新鋭の機器を購入できる。今や浜松医科大学附属病院は，特定機能病院として，ハード面でもソフト面でも，静岡県では押しも押されぬ存在として認知されている。

しかし，この法人化は果たして成功であったか否か，10年を経過した今になって考えてみると，手放しで喜んでおられない。法人化へのプロセスでは余りにも大きな苦痛が伴った。身体を壊されたり，うつ状態になった学長さんも少なからずおられたと聞く。上記のように大学病院の改善が顕著であった面は認めるが，文部科学省は，「中期目標・中期計画」の項目の詳細を新たに設け，業務運営・自己点検・内部評価・外部評価・社会貢献・国際交流・社会への透明性・教育（PBL，CBT，OSCEなど）・特徴ある研究・個人情報保護・多様な入学試験などの基準項目をもとに，各国立大学を毎年詳細に評価している。大学執行部ばかりか多くの教職員に教育・研究以外の多岐にわたる仕事に関与させ，その結果，教員の研究に割く時間は圧迫され，学術論文発表数は2006年以降，日本全体で約10%も減少しているという数字が出ている。各先進国の論文発表数が最近皆右肩上がりなのに，日本だけが減少傾向にあるのは，大変気にかかるところである。

確かに文部科学省の掲げる多くの事項は，民意の高揚に沿ったものであり，現代では必要と考えられるが，手法に問題があると思われる。このやり方で進めば，日本の科学力は衰退し，同時に国力も低下することが危惧される。文部科学省を含む政府は，大胆な決断をもって，国立大学における多すぎる業務を大幅に合理化・簡素化することに取組むべきである。いずれにせよ，教職員に課される業務の多さには誰もが閉口している。

開学40周年というおめでたい機会に，ボヤキの一端を披露してしまった。誠に申し訳ないと思いながら，筆をおく次第である。

未来に向けて更に飛躍する浜松医大

理事（財務担当）・事務局長　前　田　　広

浜松医科大学は昭和 49 年（1974 年）6 月に設置され，今年，平成 26 年（2014 年）に開学 40 周年を迎えました。

本学は，医師需要の増大に対処するとともに医師の地域的偏在の是正や地域医療水準の向上等に資するため，昭和 48 年 2 月に閣議決定された経済社会基本計画で盛り込まれた，いわゆる「無医大県解消計画」に基づき，単科の医科大学として設置されました。

開学当初は医学科入学定員 100 名でしたが，平成 7 年に看護学科が新設され，現在は大学院を含め入学定員 236 名，職員数は 1,200 名を超える体制となっています。

また，平成 16 年には，大学の自立性を高め，教育や研究を活発化する狙いで文部科学省の内部組織から独立して国立大学法人として再スタートし，中期目標に基づき学長を中心とした法人運営を行っています。

これまで本学の充実・発展のため多大なご支援・ご協力を賜りました地域の皆様方をはじめ関係の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成 25 年 11 月，政府はグローバル化，少子高齢化の進展等社会経済状況の変化を踏まえ，これまで培った機能をさらに強化するため「国立大学改革プラン」を公表しました。機能強化の方策として，(1) 社会の変化に対応できる教育研究組織づくり (2) 国際水準の教育研究の展開，積極的な留学支援 (3) 大学発ベンチャー支援，理工系人材の戦略的育成 (4) 人事・給与システムの弾力化 (5) ガバナンス機能の強化を上げています。本学では，学長のリーダーシップの下，静岡県内の中核医療を担う医師，地域のニーズの高い専門医の養成や国際的視点を持って地域医療に貢献できる看護専門職の養成，光技術を用いた特色ある基礎的研究・臨床研究推進，学生の留学支援，産学官の地域間連携の推進，年俸制の導入，学長補佐体制の整備等すでに機能強化に向けて様々な環境整備に取り組んでいるところです。

これらの取組には安定した財源が必要となりますが，少子高齢化の進展により社会保障費等が増大し国の財政も逼迫するなど大学を取り巻く社会状況が厳しさを増しています。本学が未来に向けて更に飛躍するため，安定的な収入の確保ならびに適正な支出を心がけ，健全な財務運営に努力してまいります。

また，事務局長として事務職員の能力をさらに高めるとともに働きやすい職場環境の整備に努め，一致団結して本学を発展させたいと思っています。

今後とも，本学の教育・研究・診療に対するご理解とご支援を，何卒よろしくお願い申し上げます。

開学40周年に寄せて

理事（経営・産学連携担当）・浜松ホトニクス株式会社代表取締役社長　畫　馬　　明

光とは何か？人類未知未踏の研究開発を合言葉に，浜松ホトニクスは活動してまいりました。

フォトンはご存じのように素粒子の一つで，ビックバンが起こった直後に，あるいは，ビッグバンが起こったときから存在していたかもしれないと言われております。そして137億年がすぎ，非常に複雑な構造をした，生きるとはなにか？を考える人類が誕生しました。光と生命，それは，宇宙の起源の小さな要素から始まった宇宙の神秘の始まりと，その神秘の成長のなかで，最も深淵な集大成といえる生命というものとの，両極端の言葉といえるかもしれません。

前社長の畫馬輝夫は，光の医療・健康分野への応用に深い関心を持ち，浜松ホトニクスの持つ光の要素技術が，どのように医療・健康産業に貢献できるかを，いつも追求してきました。

それゆえ，開学30年記念誌にも書いているように，静岡県に医大を設立することになったとき，是非浜松に設置していただきたいと，当時の竹山県知事にお願いをしたそうです。その時の大義名分として，「浜松は浜松高等工業学校創立以来，高柳健次郎先生により日本独自の光技術が育っております。光技術はこれからの生命科学，医療技術の発展のために大変重要なものであります。この点を考慮して是非医大を浜松に持ってきてください」とお伝えしています。竹山知事も，新聞紙上で選定理由の一つとして，浜松には光技術がある，とおっしゃってくださったそうです。

その後，本学は医療への光の応用を追求して，浜松ホトニクスともさまざまな共同研究がなされ，現在の医学分光応用寄附研究室という寄付講座が開設されました。80年代には，浜松ホトニクスの中央研究所内にPETセンター，PET健診センター（現PET診断センター）が開設され，本学との共同研究がますます充実されました。浜松ホトニクスが2年に一度開催するMind/BrainScience国際学会にも尾内先生をはじめ，本学から多くの研究発表があります。浜松で，あのような世界の最先端の研究をしている先生方が集まるのは大変有意義なことであります。最近の共同研究では，NEDOからの委託事業として，次世代PET装置の開発，レーザーによる脳血栓除去のプロジェクトなどが行われています。

また，静岡大学，光産業創成大学院大学，浜松ホトニクス，そして本学が共同で浜松光宣言をしました。浜松を光産業のメッカとし，浜松に光技術を使ったベンチャー企業が集積し，新しい産業生まれてくるように，それぞれの機関が強く協力し合うことを宣言しております。

光と医療はもともと密接な関係にあります。浜松ホトニクスの売り上げの40%ほどが医療関係であり，今後もレーザーやX線，近赤外域，さらには中赤外域の医療・健康産業への応用など，新しい光の応用が進められています。がんに対する早期発見では，すでに光技術が応用されていますが，今後はがんのマーカーの進歩により，がん細胞だけに狙いを定めた治療法にも光の応用が期待されます。脳機能の解明も一歩一歩進歩しており，考えるということの解明も可能であると信じます。

このように，原点といえる光の要素技術と，究極の応用といえる医学が強い紐で結ばれ，本学と浜松ホトニクスが世界の光医療の今後の進展に寄与できるように力を合わせていくことは，サイエンスの進歩に必要不可欠なことと思います。

素粒子と人間という生命体。両極端の追究をしている我々が，お互いの使命を果たしたとき，我々は絶対真理に一歩近づくと思います。それは，あと40年，60年かけてもたどり着かないかもしれません。しかし，それを目指さなければ，企業も大学も意義がないのではないでしょうか？

浜松ホトニクスは，昨年創業60周年を迎えました。本学も40周年を迎えたということで，お互いにこれまでの業績を踏まえながらも，それに満足しないことです。21世紀は光の時代であると共に，医療・健康産業の劇的な発展の時代でもあることから，お互いの初心を忘れず，更なる人類の光医学の発展のために，ますます努力をしていきたいと思っております。

開学40周年において，次の40年間も光技術を応用した特色ある大学として，本学がますます発展することを祈念いたします。

開学40周年に寄せて

監事　西　山　　仁

浜松医科大学開学 40 周年を迎えられ，心よりお祝い申し上げます。私は本年 4 月に監事として着任し，この記念の年に浜松医科大学に勤めることができ，大変嬉しく思っております。私は浜松生まれの浜松育ち，生粋の浜松人であります。本学が創立した昭和 49 年，私はちょうど大学 4 年生でありました。長年に亘る誘致活動の夢が実現し，浜松に医科大学が開設されたというニュースを聞き，医療環境の充実が図られることに心強さと安心感を抱いた記憶がございます。志が高い何人かの同級生は大学を卒業後に浜松医科大学に再入学。医師の道を目指し勉学に励み，その後地元で開業するなど活躍しており，地域医療の発展に貢献されております。それほど浜松医科大学の開設は地元にとって大変ありがたく，感動的な出来事でありました。今回私も間接的ではありますが地域医療の発展に貢献していければと考えております。

赴任後の第一印象を申し上げますと，まず本学は病院が全体的に明るく非常に清潔感にあふれ，不安な気持ちで病院を訪れる方々に安心感を与えられる雰囲気が漂っているということです。また，本学の教職員の方たちは非常に親切で礼儀正しいという印象を受けました。廊下ですれ違う時など，ごく自然に挨拶の声をかけてくれたり，軽く会釈をしてくれます。私は現在管理棟に勤務しているのですが，昼食を済ませ病院棟から管理棟に戻る際不慣れで迷っていたところ，椅子に座り休憩していた職員の方が困っている私の様子を見て「何かお困りですか」とさりげなく声をかけてくれ，丁寧に道案内までしてくれたのです。数日後にもまた戻る方向を探していたら，通りかかった職員の方から声をかけていただき，やはり親切に案内をしてくれたのです。人を思いやり親切で礼儀正しい職場風土が醸成されていることに感心させられました。こういった組織風土は一日にして醸成されるものでなく，日頃からの地道な教育・指導そしてお互いのコミュニケーションが実を結んでいるのではないかと思います。病院という場所柄，心配と不安な気持ちで来院された方がこのように親切な対応を受ければ，私以上に安心感と感謝の気持ちを持たれるのではないでしょうか。

もう一つ印象的だったのは，本学が半田山の緑あふれる素晴らしい環境におかれていることです。ちょうど桜の花が満開に咲き乱れている道路へ続く病院の正面玄関の前には，新しい枝垂桜が植えられています。50 周年を迎えるころには，持続的に発展する浜松医科大学に見合った，枝ぶりのどっしりとした立派な桜の木に成長しているのではないかと思います。

大学病院の再整備も昨年終了し「50 年先を見据えた病院づくり」をコンセプトとして災害に強い病院，高度先進医療などにより地域医療に貢献していくとのことで，頼もしい限りであります。また，去る 3 月には医師国家試験の発表があり，全国第 6 位の優秀な合格率でございました。今までも常に良好な成績を収めており，これは学生の努力もさることながら，教職員の皆さんの情熱あふれる指導がこのような好成績をもたらしたのだと思います。本学は地域医学・医療の中核的役割を担っており，地域貢献に対する地元の期待はさらに高まりつつあります。開学以来 40 年間，地域に必要とされ，存在感を発揮し続けてきた本学で仕事をしていることに誇りと喜びを感じつつ，建学の理念・目的及び使命に基づき大学の価値向上に貢献できるよう，役割を誠実に果たしていきたいと考えております。皆様方には今までにも増して，ご支援とご協力を宜しくお願い申し上げます。

開学40周年に寄せて

病院長　今　野　弘　之

本学が開学40周年を迎えたことは，誠に慶ばしい。世間では「新設医大」と一括りに語られることが少なくないが，開学以来40年を経た今，「歴史のある浜松医大」という冠言葉を用いてもそれほどの違和感はないと思う。初めに，現在の本学・本院のプレゼンスはこれまで本学の発展を担われた開学以来の全職員，先輩各位に由って成就されたものであり，改めて敬意を表したい。このことは，現病院スタッフ全員にとって誇りであると同時に，将来に向けて地域医療の基幹病院，医育機関として本院を発展させていく責任が益々重くなったことを意味している。

病院としての沿革は，10年毎に紹介されているので，最近10年を振り返り，将来展望の私見を述べて責を果たしたい。丁度10年前の平成16年は本学が国立大学法人として新たにスタートをきり，大学・病院の運営が大きく変化した。開学30周年記念誌では故菅野名誉教授が寄稿しているが，法人化に際し「これをチャンスと捉えるか否かは，本学構成員の気持ちにかかっている。ひたすら頑張ることを期待したい」と述べられ，同時にスタートした新研修制度とDPCについて，「大きな新しい課題を抱えた」と評された。当時，病院中がざわめいていたことを記憶しているが，病院長としての菅野先生の期待と不安がよく伝わってくる。2年後に始まった病院再整備計画に従い平成21年に新病棟が竣工，平成23年にはPETセンターが竣工した。平成23年に始まった外来棟改修工事も平成25年7月に完了した。さらに，化学療法部や外来化学療法センター，新生児強化治療室（GCU），腫瘍センター，緩和ケアチーム，感染対策室，医療安全の向上を図るために医療安全管理室などが新たに設置された。また，開放型病院として承認された。まさに，ソフト，ハード両面共に変革の10年であったと言える。概観として，様々な解決すべき課題を抱えてはいるが，良質で安全な医療を提供するための各種環境整備と，診療科の枠を超えた病院一丸となるチーム医療への取り組みが進められ，運営方法の改革と施設の充実により医療を取り巻く様々な変化に対して柔軟に対応する体制が構築されてきたと評価できるであろう。

本院の基本理念・指針である「患者さんの意思を尊重した安心・安全な医療の提供」「社会・地域医療への貢献」「良質な医療人の育成」「高度な医療の追及」はいずれも相互に密接に関連している。すなわち，本院は大学病院として先進的かつ高度な医療を提供する使命があるが，同時に高い医療の質が担保されなければならない。求められる医療の質の中で，安心・安全な医療を患者自身の意思により選択できることが最も重要である。医療安全管理，感染対策等は，この10年で飛躍的に整備され，文化として定着しつつある。今後は，患者の意思を反映させるシステムを具体的かつ持続性のある形で構築してゆく必要がある。そしてスタッフ1人ひとりが文化として自分自身の感性に定着させることが目標であり，病院長としてそのための仕組みづくりを行っていきたい。医療の質と高度な医療が違和感なく提供されることは，若い医師・看護師に対しても極めて魅力的な研修を提供できることを意味しており，良質な医療人の育成に繋がる。そして多くの若手医師が大学病院に在籍し，高度な医療を実践しかつ専門医等の資格を取得することにより，初めて社会・地域医療へ貢献できる医師の派遣等が可能になるものと考えられる。多くの卒業生が本学での初期研修を希望するように，各診療科が足並みを揃え，卒後，医療人としてのスタートの時期に，先進的な医療を経験できることの大切さと魅力を伝える必要がある。また，高度な医療を実践することが求められる大学附属病院としての活動力を高めるためには，若手医師の確保・育成だけでなく，女性医師・女性医療職への支援もまた必要不可欠である。いずれの課題も，スタッフ1人ひとりの問題認識と本院の目標の共有が大切であり，厳しい医療環境の中で今後10年の本院の成否を決める要諦は，偏に人材と組織としての「まとまり」と考える。

本院の指針の最後に記されている「健全な病院運営の確立」を担保しつつ，病院全体が一体感を持った高い質と先進性を有した医療チームとして次の10年に向かってスタートを切りたい。

開学40周年に寄せて

経営協議会委員・慶應義塾大学信濃町キャンパス事務長　上　杉　道　世

私は，清水東高校を卒業するまで静岡県内を転々とし，浜松にも幼稚園から小学校にかけて暮らしたことがある。京都大学を卒業後，昭和 49 年 4 月に文部省に採用となり，初等中等教育と高等教育を中心に仕事をしてきた。

浜松医科大学は，昭和 49 年 6 月に開学だから，私の文部行政の歩みと時期的に重なるわけで，接点も時々あった。

昭和 59 年に私は医学教育課の課長補佐となり，全国の医学部と附属病院にかかわる仕事を担当した。国立大学医学部・病院の予算の確保，医学部・病院で繰り返される不祥事への対応，医師過剰論に伴う医学部入学定員減への対応，医学教育の質の向上のための，少人数教育，体験的・対話型教育の導入などを盛り込んだ「医学教育改善会議」のまとめの作成などをあわただしく行なっていた。機会あるごとに全国の医学部･病院の現場も訪問し，浜松医科大学を初めて訪問したのもその時だった。

浜松医科大学は，新設医科大のリーダーを自負しており，教育・研究の面でも名声を上げていた。浜松医科大学の活躍ぶりは，文部省内の静岡県出身者の誇りだった。

省内の静岡県人会「羽衣会」は，数ある県人会の中でも盛況ぶりが有名であった。当時は地元静岡県で開催することにこだわって熱海や三島に泊り込み，会長の天城勲元文部事務次官の 1 時間にわたる教育問題を中心とした乾杯のあいさつを聞くのが常だった。この会にも浜松医科大学の学長や事務局長が出席し，近況報告を聞くのが楽しみだった。

その後，平成 15 年に国立大学の法人化を半年後に控えて東京大学の事務局長となり，東京大学の法人化，大学経営と事務職員の改革に 4 年間取り組んだ。東京大学においても医学部・附属病院の存在は大変大きく，巨大な人員・予算を擁し，教育・研究の注目度は高く，不祥事や事故が起きた場合の影響も深刻だった。私は法人化後は人事労務と事務組織担当の理事となったが，医学部・病院の動きには絶えず注目し，議論していた。

平成 22 年に文部省退職後，慶應義塾大学の医学部・病院がある信濃町キャンパス事務長として現在勤務している。慶應義塾大学医学部・病院は，東大と並ぶ巨大で複雑な組織であり，高い水準の教育・研究を展開すると同時に，数多くの悩みも抱えていることも共通である。

また，私は東大を経験した後現在に至るまで，全国各地の大学に招かれて，主に職員の質の向上のため SD 講演会などを行なっており，原稿執筆などの機会も多い。これらの経験を踏まえて，浜松医科大学の経営の向上のために何らかの貢献ができることは元県民の一人としてありがたいことと思っている。

これからの国立大学は，教育･研究で優れた達成を実現するためにも，大学経営をしっかりと行い，それを支える大学職員の能力向上と人材育成に力を入れる必要がある。まして附属病院を擁する医科大学は，医療の質の向上と安定した病院経営をバランスさせていかなければならない。

より長期的に見れば，今後の日本は世界の先頭を切って超少子高齢化社会となる。そのとき大学はどのような役割を果たせばよいのか。また，グローバル化の進展により，日本と世界は直結することになり，日本の大学が世界で通用するものになっているかどうかが問われることになる。科学技術の発展と情報化の進展はさらに社会の変化を加速し，大学の姿を変容させるだろう。一方，国の財政事情を見ると巨額の借金を抱えた困難な状況は続き楽観的な見通しを持つことはできないだろう。

そのような中で今後，浜松医科大学がどのような進路をとり，教育の質の向上やガバナンス強化の当面の要請に応えつつ，中長期的な将来像を形成していくことができるか，これからが勝負である。守りに入るのではなく，全学一体となって積極果敢にチャレンジしていくことを期待したい。

開学40周年に寄せて

経営協議会前委員・静岡県医師会前会長　鈴　木　勝　彦

浜松医科大学が開学 40 周年を迎えられ，これまで多くのすぐれた医師，看護師，助産師を育てられ，又，多くの立派な研究を発表されてこられた功績に対して深い敬意と感謝を表します。

思い起こせば 40 年前の昭和 49 年（1974）第 2 次田中内閣の下で「無医大県解消構想」と呼ばれた「1 県 1 医大政策」の中で 3 校が設置され，その中の 1 校が浜松医科大学であります。この時私は父が町長に出るからとの理由で戻るように言われ，現在浜松市水窪町にて一開業医の道に入り，4 年目を迎えたときでした。医大設置にあたり静岡市にするか，浜松市にするか激しい争奪戦の後，当時の竹山祐太郎知事の決断で浜松に決定し，祖父，父ともに喜びに沸いたことがつい先日のように思い出されます。因みに 1961 年の段階では医学部数 46 校，入学定員は 2,840 人でしたが，1976 年には定員数 8,020 人となり，2013 年には国立 42 大学，公立 8 大学，私立 29 大学の計 79 大学で 9,041 人となっています。その後平成 16 年 4 月国立大学法人浜松医科大学と改称され，現在，基礎・臨床医学はもちろんのこと，光医学の基礎的，臨床的研究分野に力を入れ，産官学が連携協力して共同研究や交流を深め，世界的な研究がなされており，また，創薬から臨床応用の分野にも貢献されていることは誠に喜ばしい限りであります。私も，静岡県医師会長の立場から浜松医科大学の経営協議会委員の一人に加えさせていただいていますが，大学の内容等伺うたびに，建学の理念である「すぐれた臨床医と独創力の富む研究者を養成し，独創的研究並びに新しい医療技術の開発を推進し，患者第一主義の診療を実践し地域医療の中核的役割を果たす」と謳っている通り理念に向かって実行していることに改めて敬意を表する次第です。

現在，静岡県も医師不足，医師偏在が謳われています。静岡県は裕福な県であるし，人口的にみてももう一校医大を設置して医師不足を補うべきという意見もありますが，中長期的にみて現在の医大の定員数から，2025 年には医師数は 34.6 万人となり，人口 1,000 人当たり 3.0 人と見込まれ，現在の G7 平均に相当する数となります。医大の新設より現在の浜松医科大学をより一層充実させ，県行政をはじめ我々医師会も全面的に協力して浜松医科大学を中核に，静岡県の医療体制を構築していくことが最も重要と考えております。このような意味合いにおいても是非大学の中に大学医師会を設置していただき，静岡県医師会の組織の一角として，静岡県の地域医療に対してご協力いただくことを切にお願いする次第です。

むすびに，開学 40 周年を迎えられ，これまでに発展を遂げてこられた歴代の学長先生をはじめ教職員，事務職員及び関係各位に心から敬意を表するとともに，医療環境の厳しい中ではありますが，国立大学法人浜松医科大学がますます充実発展されますことを心より祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

浜松医科大学開学40周年によせて

経営協議会委員・浜松信用金庫理事長　御　室　健一郎

浜松医科大学の開学40周年を心よりお祝い申し上げますとともに，長きにわたって，地域医療の水準向上や人材の輩出に多大なるご貢献を頂いておりますことに，深く感謝申し上げます。

昨今の医療を取り巻く環境は，医師不足，病院の撤退，閉鎖など，住民生活に多大な不安を及ぼす事例が数多く生じているようですが，浜松の地域医療環境は，非常に充実しているものと認識しています。

その大きな要因として，浜松医科大学が，地域にしっかりと根ざした存在となり，また，付属の医大病院における治療実績や治療技術水準の高さが，地域の皆様の安心につながっていることがあげられます。

これも，ひとえに，歴代の学長様を始め，教職員，学生の皆様そして，数多くの関係者の方々のご努力の賜物であると，厚く敬意を表します。

ところで浜松医科大学が開学された40年前，1974年に遡りますと，前年1973年のオイルショックの影響から，我が国の消費は急激に低迷し，企業の設備投資も大幅に抑制されるなど，戦後初の経済マイナス成長に陥り，「高度経済成長」が終焉を迎えた年でした。そして，高度経済成長の終焉は，あわせて第二次ベビーブームの終了をも招き，我が国の少子化の始まりともされており，浜松医科大学の歴史は，まさに，我が国の社会構造の変化とともにあると言えます。

当地域におきましても，この40年間で，かつては，三大産業と呼ばれた繊維，楽器，オートバイから，自動車や工作機械，あるいは光産業へと産業の軸足が移ってまいりました。さらには，12市町村の合併や政令指定都市への移行を経る中で，少子高齢化の進行とともに人口減少へと転じ始めるなど，その社会経済環境は大きな変化の真っ只中にあります。

浜松は「ものづくり都市」ということで，高度な加工技術の蓄積により，高品質，高精度の製品を産出する，我が国でも有数の企業集積を形成して，地域活力を維持向上させてまいりました。近年ではグローバル経済の進展にともなって，生産拠点の海外移転が進み，企業数の減少による地域産業の活力低下が大きな課題となっています。加えて，浜松市の人口は，現在の約80万人から30年後には66万人へと減少するとの統計予測も発表されました。

このような閉塞感が容易に払拭できない中，地域の活性化を図るための方策として，大学と産業界，行政による共同研究や共同開発など，相互連携の重要性に注目が集まり，「産学官連携」をキーワードとする新たな産業の創出や新技術，新製品の開発への取組が進められております。とりわけ，浜松医科大学におかれましては，2011年4月の「産学官共同センター」のオープンに代表される，医療とものづくり技術の融合を目指す「医工連携」への積極的なアプローチには，今後の成果への期待が大いに高まっているところでもあります。

これからの時代，明るい希望が持てる地域を次世代に受け継いでいくためには，単に産業発展，経済発展を志向するのではなく，安全，安心，教育，文化，健康，環境など幅広く目配りをし，総合的な地域力の向上を実現していくことが求められます。そうした将来の地域づくりに向けて鍵を握るのは，なんと申しましても若く有為な人材の育成と輩出であると考えます。

ぜひとも，このたびの開学40周年が，大きなインパクトとなり，浜松医科大学が，医療分野の教育や研究という枠組みにとどまらず，地域貢献へのフィールドへと，より一層広がり，まさに地域の核としてその存在感が高まっていくことを願っております。

開学40周年に寄せて

浜松医科大学同窓会会長　梅　村　和　夫

母校であります浜松医科大学が，開学 40 周年を迎えられたことは誠におめでたく，同窓会を代表してお祝いを申し上げます。

同窓会として，開学 30 年から 40 年にかけて大きな変化は，平成 11 年 3 月に新しく看護学科の同窓会員が加わりましたが，平成 20 年度から看護学科独自で同窓会を立ち上げ活動を開始しました。同窓会は平成 26 年 3 月で医学科は 35 期生が，また大学院医学系研究科博士課程は 31 期生が入会となり，総勢で，約 3,700 人の大所帯となります。同窓会員の約半数は静岡県内に留まり，医療，教育，研究等で活躍しており，また全国においても行政や教育・研究・医療に活躍している同窓生も多く在籍します。同期会も頻回に企画され，同窓会員間の交流も活発です。大学から離れてからの時間が長いほど母校に対する思いは，膨らむものなのでしょうか，同窓会員から同窓会活動に対して多くの叱咤・激励が寄せられております。また，同窓会員間のコミュニケーションをとる手段として，同窓会ホームページ（http://www.hama-med.org/index.html）を立ち上げ，最新情報の提供やコミュニケーションの場を提供しております。

さて，浜松医科大学はこの十年は国立大学法人の基礎を作る期間であったと思います。大学には社会への貢献やグローバル化といった改革が求められ，さらに予算も減らされ厳しい時代となってきております。そのような状況の中，多くの同窓生が学内の教授や准教授，さらには学外の教授をはじめとした機関や部署の長に就任して活躍しております。これも，浜松医科大学での教育がすばらしいものであったことを物語っております。今後，国際基準に適合した医学教育の改革が行われ，さらに充実したものになることを期待しております。

また，平成 8 年には同窓会主催で浜松医科大学同窓会学術奨励賞が設立され，毎年賞が授与され平成 26 年で第 19 回の授賞式が催されました。毎年，多くの優秀な論文が応募され厳選なる選考により 3 から 5 編の論文に賞を授与してきました。それらの選考された論文を拝見すると，世界で通用する研究が行われており大変頼もしく思っております。

最後に，社会からの期待は大きく，それに応えるべく大学改革を進め，さらに活気のある浜松医科大学に飛躍することを心から祈念しまして，お祝いの言葉とさせていただきます。

開学40周年に寄せて

浜松医科大学看護学科同窓会長　山　下　寛　奈

浜松医科大学が開学 40 周年を迎えられ，心からお祝い申し上げます。母校が発展して行くのを目の当たりにし，大変喜ばしい限りです。

浜松医科大学の開学当初は医学科のみが開設されていましたが，平成 7 年（1995 年）に看護学科が，平成 11 年に大学院医学系研究科修士課程（看護学）が，平成 20 年に助産学専攻科が開設されました。私が入学した平成 8 年当時，学内の様々な場所を間借りして講義や演習をしておりましたが，平成 10 年 2 月に看護学科棟が完成し，真新しい教室で講義を受けられ嬉しかったことを思い出します。その後，多くの後輩がこの看護学科棟で学んでまいりました。

看護学科の卒業生は当初，医学科の卒業生とおなじ同窓会に入会しておりましたが，平成 20 年 5 月に看護学科同窓会が独立し，同窓会に入会していた看護学科と修士の同窓生は看護学科同窓会へ移行しました。平成 26 年 3 月には，看護学科 16 期生，大学院医学系修士課程（看護学専攻）14 期生，助産学専攻科 6 期生が看護学科同窓会に入会し，平成 26 年 4 月現在，正会員は約 1,300 人となっております。看護学科同窓会では，同窓生が交流できる場を設けようと，「活動報告会」を年 1 回開催し，数名の同窓生が近況を発表しております。そこでは，自身のキャリアや近年の取組みを紹介し，看護師，助産師，保健師と異なる職種ではありますが，相互に関連する話題について情報交換しています。活動報告会は看護学科棟の講義室での開催であるため，学外に出た同窓生は思い出の教室で友人，恩師に出会い，大変懐かしんでおります。ほかにも，同窓会誌の発行や，ホームページ開設（http://www.hamai-kango.jp/）などにより，コミュニケーションの場を提供しております。今後も同窓生や学生に役立つ活動をしていきたいと考えております。

同窓生の多くは看護師，助産師，保健師として静岡県内をはじめ全国の病院，自治体，企業などで活躍しております。特に近年は看護学科卒業時に卒業生の約半数が浜松医科大学医学部附属病院に就職し，地域医療に貢献するだけでなく，臨地実習に来た学生（後輩）の臨床指導もしております。修士課程修了生も多くが医療機関で指導的立場にいるほか，大学等の研究教育機関で活躍している者も多く，同窓生 17 名が浜松医科大学医学部看護学科で教授，講師，助教，教務補佐として教育・研究に活躍しております。このように同窓生が後輩を教育・指導しており，看護学科開設からの年月の経過が感じられます。それと同時に，多くの同窓生が指導的立場で活躍できるのは，浜松医科大学で受けた教育の賜物であり，これまでご教授いただいた諸先生方に心より感謝申し上げます。また，浜松医科大学で同じく学んだ医学生との交流も盛んで，卒後もコメディカル・スタッフとしての連携に大いに役立っており，浜松医科大学は人的環境としても恵まれていると感じております。

浜松医科大学は今後も優秀な臨床医，看護専門職ならびに研究者を育成することが期待されております。そのために看護学科同窓会としても，できるだけ協力し，貢献していきたいと思っております。

今後の母校のさらなる発展を心から祈念して，お祝いの言葉といたします。